

「臨終、待つことなし」

一休さんにこんな逸話があります。

ある時、一人の男が「親父に引導を渡して欲しい」と一休さんのところをお願いに来ました。一休さんは早速その男の家を訪ねたところ、白い布をかけられた一人の老人が寝かされていました。

その老人の前に座った一休さんは、おもむろに白い布を取り、じっとその顔を覗き込んでいたのですが、ふと後ろを振り返ると、「つかぬことを聞くが、この家に金槌がおありか。もしあれば貸して下さいさねか」と尋ねたのです。

息子は不審に思いながらも金槌を一休さんに差し出したところ、一休さんはその金槌で老人の頭をコツンと叩いたのです。しばらくして、首をかしげながらもう一度叩いたのです。

その異様なしぐさに驚いた息子は「何をするのですか。おやめ下さい」と叫びました。

その声に振り向いた一休さんは、「死んだらどうか調べたまでじゃ。顔を見ただけでは、生きとるのやら死んだらどうか、どーも分からん。叩いてみたら分かるじゃろうと思うて、叩いてみたんじゃ。二度も叩いて、ウンともスンとも言わんところを見ると、これは間違いなく死んだら」と答えたのです。

そう言い捨てたかと思うと、一休さんは、さっさと帰り支度を始めました。

それを見た息子は「どうして引導を渡して下さいさらないのですか」と一休さんに詰め寄りました。

一休さんは「叩かれて痛いとは分からん者に、どうして引導を渡せるのじゃ。ええか、仏さまの教えというものは叩かれて痛いとは分かるうちに聞くものじゃ。生きているうちに聞こうともせず……それを手遅れというのじゃ」と申したそうです。

仏さまの教えは決して死んだ人相手に説かれたものではありません。

今現に、かけがえのない「いのち」を生きているこの私のために説かれているのです。

よく世間では、死にざまはどうであったかとか、どんな死に方をしたのか、ということの問題にすることが多いようです。しかし浄土真宗では「死にざま」などはどうでもいいことなのです。

大事なことは、「この苦難の人生に、いかにして喜びの灯をともして歩むことができたか、ということにあるのです。

お念仏のみ教えは「臨終待つことなし、来迎たのむことなし」と教えられているように、死に際にあの世からもお迎えを待って助かるのではありません。

生きている今日只今、お救いにあずかるという「平生業成」という教えなのです。

口を開けば、不平不満の愚痴しか出てこないお互いです。

こんなお粗末な私がお念仏のみ教えに出遭うことによって、「今を喜び」、「先を楽しむ」人生が恵まれるのです。

それが「臨終待つことなし」と言われる念仏者の日暮であります。

蓮如上人は「仏法には明日ということはあるまじき」とおっしゃっています。

明日でも明後日でもないのです。

「今」です。「今」こそが大事なのです。

平成13年2月 「光明寺だより14号」より